

のは、水道とし尿の処理であります。

水道には給水人口五千人を基準として上水道と簡易水道がありますが、上水道は三五年に霞ヶ浦（大岩田）、三七年に潮来、そして鹿島、湖北と相次いで建設され、簡易水道は現在四五カ所の多きに達し、水道の普及率は四〇%にもはね上がりました。それでも県の平均五〇%（全国最下位）にはまだとどきません。水道の普及は衛生上結構なことですから、これからも伸してゆかなければなりません。家庭での使用量は、電気洗濯機、水洗便所、自動車などの普及に伴ない年ごとに増加し、これらの雑排水は地下浸透式では賄えない切れなくなり、道路の側溝を伝わり未処理のまま直接河川に放流されるようになったので、霞ヶ浦にとっては迷惑なことです。

家庭から排出されたし尿は、消化槽、浄化槽、土壌還元、カリウムなどを含有する関係で、従来は重要な肥料資源として田畑に使用される場合が多かったが、その後は都市への人口の集中増加、化学肥料の普及とあいまって、し尿やし尿処理水が河川などに放流されたりしてし尿処理対策が緊急を要する問題となってきました。このため土浦市にし尿処理場が建設された（三四年）のを手始めに、湖北、筑北、竜ヶ崎などが建設され、ここで

処理された水は飯川、園部川、小野川などに放流されていますが、第三次処理をしてないため水質汚濁の要因となっています。

◇ 工場 誘 致

土浦市の工業は、昭和三五年に事業所数一七七。従業員数四一八人でしたが、四五年には事業所数四五五。従業員数一万人と大きく飛躍しました。これは、三八年に土浦、阿見地区が都市開発法の指定を受け、企業が続々と進出してきたからです。霞ヶ浦の周辺にはこのほか、三九年に鹿島工業特別地域と石岡地区が、四一年には近郊地帯（取手外一二町村）と筑波地区新都市などが指定を受けていますが、企業の進出は、これら開発指定地域のみではなく、過疎化地域にもみられるようになりました。日本経済の高度成長政策に伴って、工業の高度化と新しい設備投資が行なわれたため、霞ヶ浦流域でも、三五年以降事業所数六〇〇、従業員約五万人が増加しています。

これら各企業が使用している工業用水は、鹿島地域を除けば、ほとんど地下水で、その使用量は一日約一〇万トンを超えるものと推定されます。工場で汚染された水は大部分が排水管を通過して河川に流されていますが、特に工場排水の多いのは境川、山王川、清明川、花室川、